

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	ハンナ・アーレントの思想における「社会的なもの」と公共性－諸概念とそのあいだ－
Title(English)	
著者(和文)	河合恭平
Author(English)	KYOHEI KAWAI
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10688号, 授与年月日:2017年9月20日, 学位の種別:課程博士, 審査員:坂野 達郎,猪原 健弘,池上 雅子,谷口 尚子,西田 亮介,今田 高俊
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10688号, Conferred date:2017/9/20, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	論文要旨
Type(English)	Summary

論文 要 旨 (和文 2000 字程度)

河合 恭平

本論文は「ハンナ・アーレントの思想における「社会的なもの」と公共性——諸概念とそのあいだ」と題し、序章、終章を含め全9章からなっている。

序章「アーレントの「社会的なもの」と公共性の概念の双方を問うこと」では、先行研究を整理し、本研究における思想解釈の観点を提示した。これまでアーレントの「社会的なもの」と公共性は単純な対立図式で捉えられてきた。そして、公共性と「活動」概念を短絡的に結びつけ、その下に公共性論が民主主義や市民参加等に寄与するとして取り立てて受容される一方、「社会的なもの」は掘り下げて検討されてこなかった。そこで本研究は、「社会的なもの」と公共性の単純な対立図式を問い直し、公共性形成の困難さの論理を明瞭にしたうえで、なおも「社会的なもの」と公共性を架橋する論理を導き出すことを目的とする。

第1章『『人間の条件』における世界疎外に至る論理——公共性形成の困難と「始まり」への志向のあいだの葛藤』では、「労働」の拡大が公共性および「活動」を排除するという解釈のもと、後者の復権をその状況への解決策として論じる学説に対し、主に世界疎外論に照準し、これをアーレントの分析方法に則して読み解いた。結果、彼女にとって世界疎外とは、「労働」のみならず、「仕事」と「活動」によっても進行させられる現象であることを明らかにした。

第2章「「社会的なもの」の概念における経済的側面——アーレントのゲゼルシャフト論」では、アーレントにとって、そもそもなぜ「社会的なもの」と公共性が対立的なのか、また両者は完全に対立的なのかについて検討した。彼女は、スミスやマルクスの思想の批判的検討のうちにその経済的側面として生命過程の組織化に特徴づけられる独自のゲゼルシャフト論を展開し、それが生命の必然性に基づくため人間は「労働」を逃れえないと考える。ゆえに両概念が対立せざるをえないのである。また、彼女によれば、福祉国家もこの組織化に巻き込まれる傾向にあるが、他方でそれが熟議によって構成されるかぎりでは公的でありうることをも捉えられ、かかる対立が必然的ではない点も明らかにした。

第3章「「社会的なもの」の概念における集団論的側面——アーレントによるその理論構成とその危険性の把握」では、「社会的なもの」の集団論的側面について、彼女の前中期を中心とした諸テキストの記述を取りまとめる課題を引き受け、その特徴を整理した。集団論的側面の存在は90年代までのいくつかの先行研究で指摘され、ベンハビブがその公共性論への発展を試みたが、その特徴は必ずしも整理されておらず、いかに公共性を破壊し帝国主義や全体主義の展開に寄与するかについても捉えきれていない。対し本章では、アーレントが「社会的なもの」を、集団間および内外における差別と画一主義によって特徴づけ、またその歴史的事例として、19世紀社会の教養や道徳に含まれる偽善の作法をめぐる諸集団の相互関係にこそ暴力や人種主義の形成と帝国主義への展開を見ていた点を明らかにした。

第4章「アーレントの大衆社会論と全体主義論——「社会的なもの」の崩壊と歪曲」で

は、集団論的側面の観点からアーレントの大衆社会論と全体主義論の解釈を行った。先行研究ではイデオロギーとテロルの体系理解は進んだが、集団論的側面の観点が欠如しているため、そもそもその体系の基盤たる大衆社会のどの特徴が危険で、それがいかに全体主義に帰結するのかに関する解釈は不十分である。対し本章では、大衆社会は、社会に共有された利害や道徳が壊され、没我性、俗物、孤独の特徴が全面化した点こそが、集団ごとに差別化された社会以上に問題であり、それら特徴がプロパガンダや収容所を通じて組織的に破壊・歪曲されたことこそが、アーレントにとってテロル過程が可能となってしまう論点であったことを明らかにした。

第5章「アーレントの共通世界論と「活動」の危険性をめぐって——暴力への「境界」としての公共性概念」では、「活動」と公共性を短絡的に結びつける学説に対し、アーレントは「活動」の予言不可能性と無制限性という危険を問題としていることに着目し、それへの彼女の応答としてアメリカ革命を範例とした共通世界論を検討した。まず共通世界の構成要素として、ハーバーマスらが着目した権力が挙げられるが、彼女にとって権力は「活動」の危険性ゆえに暴力と結合する傾向にある。加えて本章では、約束こそが「活動」へ一定の予期を与え、なおかつ権力の同盟関係を築くことを可能とし、それが共通世界の要件であることを明らかにした。

第6章「公共性形成に伴う「始まり」の恣意性と暴力のアポリアをめぐって——アーレントのアメリカ革命論と黒人差別の認識を手がかりに」では、前章のアメリカ革命を範例とした公共性論ではアメリカの黒人差別が軽視されているというアーレント批判に対し、筆者はそれらの批判を「始まり」の恣意性・暴力のアポリアに関わるものと見なし、彼女がその問題を実際にどのように認識し、どう克服しようとしたのかを検討した。結果、彼女の中期思想の時点で、実は彼女は黒人差別をアメリカの「始まり」のアポリアと認識し、黒人の公的自由への平等化を主張しつつも具体的な構想を描くことはできなかったが、後期思想に展開された市民的不服従論によってこそ、「始まり」に成立した約束と熟議の原理に基づきながら再同意を可能とする理論を彼女が確立させていたことを明らかにした。

第7章「「社会的なもの」の概念から公共性形成の可能性を導出する——アーレントのソキエタス概念とアソシエーション論の構想」では、アーレントが「社会的なもの」から、どのように公共性形成のための足場を見出し、そのことを想していたのかを検討した。まず、古代ローマを起源とし、同盟によって構成される人間関係を指すソキエタスへの彼女の評価に着目した。結果、彼女は、ロックの水平型契約、モンテスキューの「関係の法」(*lex*) および社会概念にその思想系譜を見出し、それが約束と熟議による諸権力の同盟関係から構成された公的な社会編成を提示している点を明らかにした。そして、かかるソキエタスの形成を要件に、集団論的側面に属すアソシエーションこそが公共性を構成することがアーレントの構想であったとして結論づけた。

終章では各章の議論をまとめ、結論および今後の課題を論じた。

論 文 要 旨 (英 文)

(300 語程度)

(Summary)

This thesis challenges the conventional understanding that the concept of “the social” is opposed to “the public” in Hannah Arendt’s thought. It proposes the argument that the opposition is more complicated and that the building of “the public” is difficult. Moreover, it suggests that we could find the potential for forming “the public” from “the social.”

Firstly, the destruction of “the public” is brought about not only by the expansion of “labor” in the social realm, but also by the unpredictable and limitless features of “action,” which has been considered to be part of “the public” in traditional theories. Moreover, the aspect of groups in “the social” is a decisive element that encourages racism and intensifies violence against discriminated groups, and it leads to not only imperialism, but also totalitarianism, in addition to the aspect of economy in “the social” is an organization of the life process, i.e., *Gesellschaft*, in Arendt’s thought. According to the above considerations, the formation of “the public” is extremely difficult in contemporary society.

Secondly, this thesis considers the building of the common world as a solution to the problems of unpredictability and limitlessness in “action” in Arendt’s argument on the American Revolution. The common world is composed by both “power” formed by people acting together and “promise.” However, “power” itself tends to be unpredictably related to violence. Then, it is through “promise” that people can expect the results of “action” and avoid potential violence. Arendt places great importance on the interconnected principle of mutual promise and common deliberation, and offers an idea to dissolve the aporia of arbitrariness and violence derived from the beginning of “action.”

Finally, Arendt’s idea regarding the formation of “the public” from “the social” is examined in the last two chapters. She refers to a genealogy in the literature on society called *societas*, which is derived from the way alliances were made based on “promise” in Ancient Rome. She also interprets John Locke’s contract theory and the concept of the law as the rapport in Montesquieu’s thought as a type of the genealogy. In conclusion, Arendt’s idea is that people acting together in associations in “the social” can constitute “the public” by forming *societas*.